

私と彼女の至近弾

はやぶさ。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西住殿が好き。いつからかそう思ってしまった秋山優花里は、その気持ちに罪悪感を感じてしまっている。思い悩みすぎて、練習でミスを連発してしまった優花里は、試合の前に恋心にケリをつけようとするが……。

目次

私と彼女の至近弾

1

私と彼女の至近弾

「優花里ー、お風呂できたけど先入るー?」

階下から響くお母さんの声に、私ははっと我に返りました。

「……後でいいや。」

「わかったわ、ご飯できたら呼ぶからねー。」

生返事をして畳に突っ伏します。そんなつもりは無かったのに、はあー、とため息が自然にこぼれました。

疲れて閉じた私のまぶたに映るのは、今日の練習の風景でした。

「ウサギさん、予定より数秒行動が遅れてます!すみませんがもう一度やり直しです!」
「は、はい隊長、申し訳ありません……。」

普段は和気あいあいとしている大洗女子の戦車道クラスですが、西住殿が指揮をとる練習の時は、見違えるように引き締まった雰囲気になるのが常です。ですが、今日の西住殿は一段と厳しい顔つきでした。普段なら目をつぶるようなミスでも見逃しませんでしたし、練習中数回は飛び出す冗談もなし。武部殿も空気を読んでか、いつもより通信の口調が少々硬かったような気がします。

その理由は、私の部屋のカレンダーを見ればすぐ分かることでしょう。なにせ、明後日に当たる日付に、赤字で「プラウダとの親善試合日!」と大きく書かれているのですから。

でも、私がつめ息をついてしまった理由は、今日の疲れだけではないのでした……。基礎練習が終わって、2グループに分かれて練習試合をしていたときのことです。

ドーン!

轟音とともに、私の目の前のヘッツアーに向かって砲弾が飛ぶ……はずでした。

「……おかしいですね。撃破判定が出ない。」

発砲し終えた五十鈴殿が、怪訝そうな声を上げました。

そんなはずはない……。私は慌てて双眼鏡を手にも確認します。

……確かに、ウィークポイントに着弾したはずのヘッツアーから白旗が上がりません。

「……優花里さん? それ、空砲じゃない?」

遠慮がちな西住殿の声が上から降ってきました。

「えっ、あつ、す、すみません! 間違つて空砲を装填してました!」

ガガガッ、固定砲塔のヘッツアーがゆっくりと旋回してきました。

「何だかよくわかんないけどー、こりやチャンスつてやつじゃない? かあーしまー、

やったれー！」

「はっ、おまかせあれ！」

のんきな会長殿に続いて、河嶋殿の凛々しい声が聞こえた、と同時に着弾の衝撃が車体を揺さぶります。

「……桃ちゃん、練習の時はちゃんと当てるんだよね……。」

「あんこうチーム行動不能！これにてAグループの勝利、試合終了！」

「今日の練習試合は本当に申し訳ありませんでした……。私があんな装填ミスなんてしなければ……。」

「もう、大丈夫だってゆかりん！ミスは誰にでもあるんだからー。」

「その通りですよ優花里さん。ほら、失敗は成功の母、とも言いますしね。」

私はますます身を縮めました。皆さんの優しい心遣いが心にしみます。

「ほら、みぼりんも平気だって言ってるし、ね？……みぼりん？どうしたの？」

西住殿を見ると、硬い表情で横を向いていました。

「あ、なんでもないよ。ごめんね、ちよつと別のことを考えて……。優花里さんのミスは、うん、全然大丈夫だから……。」

「最近なんか元気ないけど、本当に大丈夫なの、みぼりん？」

「明後日が親善試合ですから、緊張していらっしやるのでしょうか？……そうだ、皆さん

で何か食べて行きましようか？」

五十鈴殿がそう提案してくれましたが、

「ううん、今日はちよつとやめとくね。ごめん、せつかく誘ってくれたのに……。」

あの後結局、私も気分が上がり、早めに皆さんと別れて帰ってきてしまいました。

やっぱり西住殿は私のことを怒ってるんでしようか。そもそも私が西住殿の前に出ると緊張してしまつて変なことを口走つてしまつたり、あんな初歩的なミスをしてしまうのがいけないんです。

いや、元はといえば私が西住殿に“そういう”気持ちを抱いてしまったのが悪いに決まつてます。でも、私は、私のこの感情は、紛れもなく……。

小さな頃から戦車一筋で、友達すら居なかつた私にとつて、当然、恋愛なんて全く縁のないものでした。クラスメートがおしゃれに着飾っているのを横目に戦車模型を磨き、みんなが彼氏とデートに出かけているのをよそに戦車イベントに向かう。そんな生活でしたが、私は全然惜しいとは思いませんでした。むしろ戦車にこれだけ愛を注げるのに、なんで現実には恋愛をしなくちゃならないのでしょうか、そんな風に考えるのが当たり前になつていたのです。

でも、あの時テレビで西住殿を見たときから、私の気持ちは変わり始めました。西住

殿が大洗女子に転校してきて、同じ戦車に乗るようになってからは、私ははつきりと西住殿への恋心を持つようになっていました。

西住殿を恋しく思う気持ち、好きだと思ふ心は、私の生活を色鮮やかにしてくれました。戦車道をとって、たとえ辛いことがあつたとしても、西住殿が近くにいるから頑張れる。同じ戦車に乗って、そんな気持ちを感じるのが、いつしか楽しみになっていきました。

だけど、私の心の違う部分—もしかしたら「理性」と呼ばれる部分なのかもしれない—は、こんなのはおかしいと語りかけてもいるのです。女性同士なんておかしい。そもそもあの西住殿と友達でいられるだけで凄いいことなのに、ただの戦車オタクの秋山優花里が恋人なんておこがましい……。私が西住殿を思うたび、どこかで否定する声が聞こえてきます。

私は頭を強く振り、悶々とした感情を無理やり押しやりました。とりあえず、全ては明後日の親善試合にかかっています。なんとしてでも最近の不調をもとに戻さなければ……。ば……。

ジリリリ……ジリリリ……

「優花里—、遅れるわよ—！」

はっ。私は時計を見て飛び起きました。このままだと完全に遅刻してしまいます。

昨日考えすぎてあまり寝られなかったせいでしよう。私は準備もそこそこに家を飛び出しました。

「明日はいよいよ、プラウダ高校との親善試合となります。緊張せず、練習通りしっかりとやりましょう！」

「それでは今日の練習終わり！解散！」

みんなはガヤガヤと騒ぎながら散っていきます。私も帰ろうと準備していたら、ポンと肩を叩かれました。

「秋山ちゃん、試合で空砲なんて撃ったらカチューシャに笑われちゃうぞ？今日はちゃんと寝とけよー。」

「か、会長殿……。」

返す言葉もありません。今日はなんとか遅刻せず済んだものの、寝不足もあいまってうまく練習に集中できず、凡ミスを連発してしまうという散々な結果でした。西住殿ともきちんと話そうとも思ったものの、結局話しかけられず、おまけに西住殿の態度もさらに硬くなったような気がします。

こんな調子なら、明日の試合も絶対にミスをしてしまうでしょう。でも、これ以上の失敗は許されません。ならいつそ、西住殿に気持ちを伝えて、それで、潔く離れるしか

……。

「あ、あの西住殿っ！」

声をかけた西住殿の肩がビクツと震えるのが分かります。

「ど、どうしたの優花里さん……？」

「あの、ちよつとお伝えしたいことがありまして……。」

すぐく小さな声になってしまいました。戦車道クラスの皆さんと会えて、少しは私のコミュ障もマシになったかと思っていたのですが、まだまだ治っていなかったようです。

「実はね……私もちよつと優花里さんとお話したいことがあるんだ。よかったら、うちに寄ってくれないかな？」

えっ。状況を飲み込むのに数秒かかりました。どうして私は西住殿のご自宅に誘われているのでしょうか……？

「い、嫌だったら別にいいんだけど……。」

「そ、そんな滅相もない！私で良ければ、行かせていただきます！」

考える前に、勢い込んだ言葉を口走っていました。

シユー、シユーと、キツチンからお湯が沸く音だけが静かに聞こえてきます。

私は西住殿と向かい合って座りながら、ただうつむいて机を見つめていました。西住

殿は、きっと私の最近の不調について叱るおつもりなのでしょう。

西住殿とお家で二人つきり。本来なら嬉しくて仕方がないような状況なのに、今の私は重い鎖で縛り付けられているようで、身動きすらままならないのでした。

「……お湯、沸いたみたい。お茶淹れてくるね。」

西住殿が湯呑みを手渡ししてくれました。普段優しい西住殿ですから、人を叱ることに慣れていらつしやらないのかもしれない。

「あ、あの、優花里さん……。」

西住殿の小さな声が飛んできました。思わず目を上げると、西住殿の戸惑っているような視線とぶつかりました。

「やっぱり、私の家に来るの、嫌……だった?」

あれ。私、何か勘違いしてしまったのでしょうか。

「と、とんでもないです!私は……その、西住殿が私を叱るおつもりかと……。」

「叱るなんて……。そんなことするわけないよ。優花里さんは、大切な仲間で、その、友達、なんだし……。」

西住殿の言葉が、どこかよそよそしく響きました。

ともだち。以前の私なら夢にも見なかったような言葉です。なのに、どうして嬉しいという気持ちになれないのでしょうか。数ヶ月前まで独りぼっちだった私には、その四

文字すら、縁遠くて、でもずっとどこかで憧れてきた言葉のはずなのに。

「……ありがとう、ごさいます。」

そうですね、やっぱり私達、友達、なんですよね……。私は小声でつぶやきました。

「えっ、今なんて……？」

「な、なんでもありません。ごめんなさい遮ってしまつて。」

「そっか……。あのね、優花里さん、最近、調子悪そうだから、もしかしたら何か悩んでることもあるのかなつて。それで、私でよければ、なにか力になれたらいいかなつて、そう思つたの。」

私は何も言えませんでした。言えるはずありません。こんなに優しく、素敵な西住殿に、私なんかの恋心があるなんて、そのせいで、こんなことになつてしまつているなんて、そんなこと、言えるはずが……。

「あ……私なんかより、ご両親に言つたほうが、いいかな……。ごめんね、私、親とあんまり上手くいってないから、そういうところまで気が回らなくて……。そもそも優花里さんが調子悪いのつて、私が……。」

西住殿の声がどんだん尻すぼみになっていきます。

「ち、違うんです！」

「えっ……？」

「け、決して西住殿のせいなんかじゃありません！これは、私が、私が勝手に……。」

その先は……。ついに言葉にできませんでした。私は腰を浮かせてしまっていることに気づき、そつと座り直します。気まずい沈黙が居間を支配しました。

やがて、西住殿がおずおずと、

「あの……遅くなっちゃったし、よかつたらご飯食べていかない？作り置きのものしかないんだけど、さ……。」

「……じゃあ、お言葉に甘えて、いただきますね。」

私はそう返すのが精一杯でした。

どこかこわばった空気の中での夕食を終えると、私の気持ちは再び沈んだものになりました。

西住殿が好き、その思いに嘘偽りはひとかけらもありません。でも、西住殿はこんなこと望んでいないはず。その大きな壁を壊すことは、到底できそうにありません。

「あの、さっきの話なんだけど……。」

「に、西住殿！」

私は思わず、声を上げていました。

「優花里さん……？」

「あの、本当に、私なら大丈夫ですから！その、気を使っていたいてありがとうございます」

ました！この度は、ご迷惑おかけして、すみませんでした！」

私は顔を伏せたまま、立ち上がりました。

きらりと光る水滴が、ぽたりと落ちるのが見えました。ああ、フローリングを濡らしてしまいました。私はどうやら、最後まで西住殿に迷惑をかけて終わってしまうようです。

私が扉に向かいかけたその時、右腕が強い力で引つ張られました。

「優花里さん！」

「に、西住殿……？」

「迷惑なんかじゃ、ない、よ……。」

西住殿の声は、その力に反してか細くて、今にも消えてしまいそうで。

「こんなこと言ったら、嫌だよね……。でも、私……。」

心臓が大きく跳ねました。握られた西住殿の手から、かすかな震えが伝わってきます。

「私ね、優花里さんのことが……好きなの。」

その声は、いつもの西住殿でした。そう、砲手席の上から聞こえるだけで、私の心を幾度となく浮き立たせて、躍らせて、そして安心させてくれた、その声でした。

パンツァー・フォー！と明るくいつもみんなに呼びかけていたその声。いつか、私に

だけ、言葉を届けてくれる、そんな瞬間が来たらいいのに。密かな私の思いは、でも欲張りで、わがまままで、自分勝手に、そんなことはわかりきっていたはずなのに、止められなくて……。

「私も……私も、西住殿が好きなんです！」

ようやく喉から出た声は、笑っちょやうくらいかすれていて、みつともなくて、西住殿の声とは似ても似つかないものでした。

ようやく、形になった私の心。それは不格好で、見苦しくて、でも、どこまでもまっすぐなものでした。

気がつくと、私は西住殿の腕の中にいました。ふわふわした感触、さわやかな石鹸にかすかに鉄が混じったようなそんな香りが、私の五感を刺激します。

「……あのね優花里さん。改めてこんなこと言うのも可笑しいけど……。私と、付き合って、くれる、かな？」

私は西住殿の顔を見上げ、そこにいつもの優しい笑顔が戻っているのに気づきました。

ああ、これです。私を捉えて離さない、全てを包み込むような笑顔。私は、この表情に恋をしたのでした。

「……ふつつか者ですが、不肖秋山優花里、精一杯頑張ります。これからも、よろしくお

願います！」

どこかで似たようなことを言った気がします。私の語彙力ではこれが限界なのでしょう。でもいいんです。込めた気持ちは、全然違うのですから。

「優花里さん、付き合ってる二人がするコト、知ってる？」

西住殿は少しいたずらっぽくこう言いました。

「え……二人？か、カップルってことですか？」

言った途端、頬がカツと熱くなるのを感じました。

いくら戦車オタクとはいえ、私だつてそれ以前に所謂「年頃の女の子」ではありません。

「じ、自分に縁があるとは思いませんでしたが、人並みに“それ”の知識はあるつもりでは……。」

うふふ、と西住殿が笑いました。こういうときの西住殿は、どこかお姉さんのまほさに似ているような気がします。血は争えない、といったところでしょうか。

「じゃあ、ちよつとやってみていい、よね。」

言うなり、私のセーラー服に手をかけ、持ち上げ始めました。

「ああつ、ちよ、ちよつと待ってください、西住殿っ」

仲間を大切に、慎重な作戦を練りながらも、いざという時は自分が先陣を切つて飛び出す、まるで西住殿の戦いぶりのようです……。

そうだ、こう言ったら西住殿はどう返してくれるのでしょうか。つい、好奇心がうずいて、こんなことを聞いてしまいました。

「西住殿……この作戦、何ていう名前なんです？」

「作戦……んー、そうですね、」

もつとラブラブ大作戦！なんてどうでしょう、そう少し恥ずかしそうに笑った西住殿に、私の中に渦巻いた欲情が溢れ出しました。

つつ、つつと、西住殿の細い指が私の秘部をなぞります。

「んっ……んんんっ」

「声……我慢しないでいいんだよ？」

西住殿の顔は上気して赤く、荒い息が私の髪をくすぐります。

「すごい……こんなにびちよびちよになってる……」

実際、私は自分でするときよりも何倍もの快感を感じていました。

「に、西住殿……好きですっ」

私は発作的に、西住殿の唇を奪っていました。僅かに目を見開きましたが、やがてそつと伏し目になります。

ぐちゅり、ぐちゅりと淫靡な水音が脳に響きます。私は舌を差し入れ、必死で西住殿の口を食りました。

「優花里さん……いいかな？」

西住殿は遠慮がちに腕を回してきました。

「はい……」

西住殿の秘部と、私の秘部が触れ合うたび、たまらない快感が突き抜けます。まるで私と西住殿の熱い気持ちがあるまま迸っているかのようです。

気がつくとい私は、夢中になって腰を動かしていました。

どれくらい時間がたったのでしょうか。朝日の温かい光が、カーテン越しに私達を照らしていました。

西住殿は私を抱えたまま、すーすーと寝息を立てています。

もうすぐ起きなくては、と思いつつも、なかなか起き上がる気にはなりません。

「もう少し……こうしても、バチは当たらない、ですよね。」

腕の中の西住殿が、それに応えるかのように、そつと寝返りを打ちました。

「プラウダ高校フラッグ車、行動不能！よって、大洗女子学園の勝ち！」

思わず、はぁと安堵のため息がこぼれました。親善試合とはいえ、強豪の一角であるプラウダに勝てれば嬉しいものです。

その思いはみんな同じだったようで、我先にと戦車を飛び出し、抱き合ったり、歓声

を上げています。

「……ありがと、優花里さん。」

えっ、西住殿、何か言いましたか。とぼけてはみましたが、聞こえてしまったことは私の表情でバレバレでしょう。

「ううん、なんでもないよ。さっ、みんなが待つてる、行こう?」

西住殿はにつこり笑って、私の手を握って外に出ました。

私は、みんなのところに向かって歩きながら、

「あの、西住殿……。もう少し、手を握ってて、いいですか?」

西住殿は少しはにかんで、そして、いいよ、と微笑んでくれました。

「あーみぼりにゆかりんやつと来たー……。って、なんで手繋いでるの?」

五十鈴殿が、あらあら、とすべてを察したような表情でうなずきました。

「うふふ、こういうことは沙織さんにはもうちよつと早いかもしれませんわね。」

「えーひどーい! 教えてくれたっていいじゃない!」

まあまあ、時間が経ったら分かりますよ、と五十鈴殿がとりなしています。

「やつと来たわねミホーシャ……。って、なんで手を繋いでるのよ?」

ノンナ殿の肩で悔しそうな表情のカチューシャ殿が現れました。

「あら……。Поздравляю со свадьбой! (結婚おめでとうござい

ます) ……カチューシャ様には、まだ早いでしょう。」

「ちよつとおー! 日本語で話さないよお! ……まあいいわ。そういや今日のミホーシャはやけに調子良かったわね。今回はおめでとうと言っておくけど、次は容赦しないわよ! じゃまたね!」

「カチューシャ殿は元気がいいですねえ……。」

眩くと、

「あら、私もよ?」

西住殿は楽しそうです。

「これも全部……優花里さんのおかげなんだから。」

私は微笑んで、西住殿の手を、ぎゅつ、と握り直しました。